



「貧しい中でも明日を信じて生きる姿に感動しました」と語るマリさん＝東京都千代田区丸の内

My Town  
わが街

My FRIEND  
わが友

MARI  
マリ

CHRISTINE  
クリスティーン

異文化コミュニケーター。国際連合人間居住計画親善大使。東京生まれ。4歳まで日本で暮らす。父の仕事でドイツ、米、イランなどに滞在、多様な文化の中で幼少期を過ごす。数カ国語に精通し、国際会議やオーケストラコンサートの司会、テレビ、ラジオ番組に出演。講演活動も活発に行い、異文化のパイプ役に。上智大卒。

「GHQにやってくれな  
いか」。毎年、米国から日  
本に遊びに来た父の口癖で  
した。若い人たちには分か

## 1 日比谷

らないでしようが、日比谷  
の第一生命本館は、太平洋  
戦争で米軍の空襲から焼け  
残ったビルで、マッカーサ  
ーが率いる進駐軍が接収し  
て連合軍総司令部（GHQ）  
を置いたのです。  
父、ビクター・フランク  
・ニオシはイタリア系の米  
国人で、陸軍情報部の暗号  
解読のスペシャリストとし  
て、GHQで働いていまし  
た。「日本は変わったな  
あ。終戦直後は本当に何も  
なかったんだよ、マリ」と  
毎年同じように話し、日比  
谷の東京宝塚劇場が「アー  
ニー・パイル劇場」、銀座

# 「GHQに行ってくれ」

の和光は「PX」と昔の名前  
で呼び、私の運転する乗用  
車で通り過ぎる町並みに過  
去を重ねていたよつです。

父が母と知り合い結婚し  
たのは一九五三年五月。私  
はその長女として、原宿の  
米人専用の居住地区「ワシ  
ントンハイツ」で生まれま  
した。母の友達が米国兵と  
結婚しており、「まじめな

人だからお付き合いしてみ  
たら」と父を紹介したので  
す。「米国に好きな女性が  
いる」と初デートでちゃん  
と断つてからの付き合いだ  
ったといえます。本当にま  
じめだったんですね。ちょ  
っとほほ笑ましい気がしま  
す。

物のない貧しい中でも明日  
を信じて生きる人たちの姿  
が感動的ですが、この映画  
のもう一人の主人公は東京  
タワーでしょうね。着工が  
五七年六月、完成が翌年の

十月ですから、私もこの首  
都の空に伸びる高い塔を見  
上げながら、幼年時代を過  
ごしたことになります。

東京タワーの下にはボウ  
リンク場があり、両親によ  
く連れて行ってもらいまし  
た。腕に「だっこちゃん」  
をぶら下げながら東京タワ  
ーの駐車場を歩いた記憶  
が、鮮明に残っています。  
今は新しい東京タワーの計  
画が進んでいます。当時  
は東京タワーからの電波に  
乗って、テレビで仕事をす  
ることなどまったく予想も  
していませんでした。

（題字も）

＝全10話